

# 緩山河

## 第15号

平成14年 5月25日

発行

社団法人 沼津牧水会

### 目次

牧水の位置	2
特別企画「牧水歌碑展」	5
幻の峠 二本松へ	8
第48回 沼津牧水祭	
碑前祭・芝酒盛	10
短歌大会	11
第14回 雛の歌会	12
文化講座	13
サロン音楽の夕べ	14
平成13年度事業報告	15
定款・編集後記	16

# 牧水の位置

玉城 徹

一  
牧水の存在は、どこか独自だという感じを人に与える。しかし、それは比較の問題だから、検証を必要とするであろう。

啄木もたしかに特異であるが、それは、ある明確な意図と限定に裏打ちされたものであった。前田夕暮は、時代の無機物的物質感覚に鋭敏だったが、それだけに、一般的なモダニティーに溶解してゆく危険が大きかったと言えよう。

そこにこそ夕暮の運命的な問題があった。わたしたちは、夕暮をもっと高く評価してよい。そして、夕暮・牧水時代という短く終った一時期の意味も考え直されてよいのである。白秋と茂吉とは、それぞれの選択があった。ずっと自覚的である。その選択の仕方自体が、彼らの独自性を形づくるのである。

微妙で、しかも決定的なちがいを、文学史の中に見別ける、いや、むしろ味わい別ける必要がある。「細部に神は宿る。」大ざっぱに、

勝手な遠近法で歴史を見たのでは、何も理解できはしない。

こうした中で、牧水の存在を見る時、何だかこの人は、奇妙に、いわば心からユニークな人だったように思えてくる。

この見方は、もつとも、すこぶる危険である。価値評価の問題を、ここに、すべり込ませないように気をつける必要がある。

天成の歌人などと、身びいきな美辞麗句ばかりでは、何ごとも明らかにならないのである。ユニークであること自体は、善でも悪でもない。

## 二

わがこころ海に吸はれぬ海すひぬそのた  
たかひに瞳は燃ゆるかな（『海の声』）

どうも変った文体だと言わなければならぬ。「わがこころ」と、最初から、「心」を主語に仕立てて来たところ。続いて「海に吸はれぬ海すひぬ」と小刻みに運んで、「そのたかひに」と指示して受けたところ。「瞳は燃ゆる

かな」と自分の姿を、まるで、小説の主人公のように、最後に持ち出すのも、当時としては、奇抜といえよう。紛れもなく、翻訳調である。



後列左から中村憲吉、斎藤茂吉、前田夕暮、古泉千樞  
前列左から尾山篤二郎、西村陽吉、土岐善麿、若山牧水  
（大正3年3月 銀座のカフェ・ヨーロッパにて）

牧水は、モダンな素材は、ほとんど用いない。どちらかというと、無縁である。それにしては、文体が、ストレートに翻訳調なのは、どうしてであろう。

こういう点も、もつと考えてゆかなければならない。牧水という点、すぐに、純粋無垢な歌人像を思い浮かべる伝説的なディスクー

ル（お話）は、有害無益である。文学とは、何の関係もない。

牧水の恋愛自体が、翻訳小説を地で行ったようなところが見える。文学作品から、逆に伝記を構成して、その伝記からあらためて、作品のリアリティーを保証したりするのは、愚かなことと言わなければならぬ。

もともと、作者自身、翻訳小説式の恋愛を実行してみたのであるが、現実の恋愛過程がどうであったかは、知ることが出来ないのである。

明星派流の美化とは、レヴェルの違う問題である。普通の若い男女の間にありがちな恋愛事件に過ぎない。ただ、それが、翻訳調を基礎として歌われるのである。独善的と言えば独善的である。

まるつきり虚構とは言わぬが、余りにも文学的で、世間一般には考えられない、こんな恋愛がどこかで進行中だという幻想が、ある範囲の読者をひきつけるのである。まだ映画というものが、力を発揮しない時代だけに、この魅力は大きかったろう。

翻訳調と言えば、人人の愛誦する「白鳥は」にしても、「幾山河」にしても、実は、一種の翻訳調である。翻訳調に慣れた若い読者が、あらかじめ存在したから、これが喜ばれ、次

第に広く滲透したのである。

翻訳調の愛誦歌が出現したことも、明治の文学史の顕著な一ページとして、記憶されなければならぬだろう。

### 三

啄木、夕暮、牧水、白秋、茂吉、すべてが十九世紀の八十年代の生れである。彼らは二十世紀短歌の二世代を形づくった。これは、もはや、文学史の初歩的常識と言つてよい。



正岡子規

第一世代は、正岡子規（一八六八年生）をはじめ、大まかに言えば、七〇年代生まれまでの作者たちから成る。二つの世代の年齢差は、数年からせいぜい十数年程度である。両世代が代表する二つの時期に安易に名称をつけることは慎まなければならぬ。それは真相を見失わせる。

確立とか、成熟とかいう、自然な成長過程が、そこにあつたわけではない。異常で、急激な変化がおこつたのである。

日清戦争後の工業化から、日露戦争を経て、日本は、たちまちに、帝国主義国家すなわち列強の一つに変貌した。世界が、この東アジアの空白地帯に一帝国主義国を必要としたのであり、また、日本自身、そうしなければ生き残ることが困難なことを、早くから悟つたのである。

われ歌をうたへりけふも故わかぬかなし  
みどもにうち追はれつつ

この一首が、『海の声』の巻頭に据えられたことは、けだし、意味深いと言ふべきである。理由を知らぬ悲哀に、ただ、うち追われうち追われして歌をうたう青年が歴史の舞台に登場したのであつた。

第一世代に属する人びとの姿と比較すると、これはまあ、何という大きな違いが、そこにあることか。

鷗外と漱石とは、自分の周囲にある、こうした青年たちの姿を、驚きの目で、凝視したのである（『青年』あるいは、『三四郎』、『それから』）。彼らは、わけのわからぬ力に引かれて進んでゆく。ある時は「ストレイ・シープ」であり、ある時は、「眉を焦がすほど」の

大きな火を感じつつ走り出すのである。

それでも、啄木は、まだしも、「時代閉塞の現状」として、それを客観化する力を所有してきた。大がいの場合、盲目という象徴が、そこに、代置される。



『海の声』出版時の牧水

牧水に「眼のなき魚」が出て来たり、白秋が詩に「盲目たる窓」をうたう。故なしとはしないが、いささか、安直のきらいがないでもない。象徴と言っても、主観に、客観的形象を当てはめただけで、あまりにも、簡単に過ぎよう。

ただ、時代の空気を読みとる上に、これは便利だとも言える。

#### 四

八〇年代生れの青年たちは、自分では知ら

ぬうちに、帝国主義時代の詩人になったのである。何も帝国主義イデオロギーの持主だったわけではない。日露戦争を、少年時代の末の眼で眺めた彼らは、青年期を、むしろ非現実的な高等遊民として過ごしたのであった。

生活の実情は、まちまちであり、遊んだ期間も長短あるが、それでも、遊民的要素が、何がしか発見できるという意味である。

心の傾きにも、いろいろある。夢想的か、享樂的か、それとも社会的か。あるいは、道徳的か宗教的か。いちいち数え切れないが、それらは、かなり偶然の契機によるところがあり、一人の詩人の中に、それが同席する場合も少なくない。

それらを統一するものとして、遊民的要素がはたらいたと見るのである。〈遊民〉という思想ではない。むしろ、自然的な力でもあるかのように、遊民的状態が彼らの上に訪れたのである。

何にしる、白秋の身におこった事件に、志賀直哉が同情し、激励の言葉を書き送った時代である。直哉が娘義太夫にのぼせ上がった、そして、『桐の花』に、その詞章がなまなましい痕跡を刻んだりしたのである。その空気を忘れて、抽象された〈近代短歌〉を論じてみても、何とも、虚しい感じがされる。

遊民状態を彼らに贈呈したのは、日露戦争後の帝国主義であった。誤解してはならないが、それは、単なる資本主義の発展ではない。異質な時代の始まりである。

第一世代の作った〈近代短歌〉を彼らは受けついでわけではなかった。そこは、断絶があった。それ故に、初期に対する中期という便宜的な命名も、余り事実にならぬものとならないのである。彼らは、新しい空気の中に生き、そこから詩を汲み上げたのである。

その後、彼らを襲った大きな困難については、ここに述べる余地が、もはや無い。そこから、道は、昭和へ、もっと厳密に言えば、一九三〇年代へ直通するであろうか。直通しなかったことは、歴史が証明するのである。

〈戦争と短歌〉というごとき現象面だけを論じてみても始まらない。牧水を含む、第二世代の詩人が、はたして何者であったかを、もっと深く観察してゆく必要があるかと、わたしは考えるのである。

〈筆者プロフィール〉(たまきとおる)

一九二四年宮城県生まれ。「うた」主宰。歌集に『馬の首』『樛木』『時が、みづからを』、評論に『近代短歌の様式』『近代短歌とその源流』など。第七歌集『香貫』で第八回短歌新聞社賞、第二十四回現代短歌大賞受賞。

## 特別企画 牧水歌碑展

### 九州・中国地方の歌碑をたずねて

榎本尚美

平成十三年七月二十四日から八月二十六日まで、沼津市若山牧水記念館において、若山牧水歌碑展「九州・中国地方の歌碑をたずねて」が開催され、多くの方々の来館を得た。

牧水歌碑については、大悟法利雄著『牧水歌碑めぐり』（昭和五十九年）や牧水生誕の地宮崎県東郷町教育委員会編纂『若山牧水全国歌碑集』（平成四年）などの著作があったが、昭和六十年の牧水生誕百年以降その歌碑は全国各地に建立され、徐々に増加して数が判然としなくなった。そこで牧水長男若山旅人と相談して歌詩碑を調査し、平成八年十月に『若山牧水歌碑インデックス』を刊行した。その時点では歌詩碑が百八十四基、文学碑が六基あったが、現在は歌詩碑二百六十九基と文学碑九基に増加した。（表1）

牧水歌詩碑は全国にどのように分布しているであろうか？表2に示す通り、北は北海道から、南は沖縄県まで見られるが、東日本に百二十五基と西日本に百四十四基が存在する。

表1 10年毎 若山牧水 歌詩碑文学碑の建立数 (平成14年1月迄の統計)

年 度	西 暦	歌詩碑建立数	文学碑建立数
昭和4年～昭和14年	1929～1939年	5基	
昭和15年～昭和24年	1940～1949年	5基	
昭和25年～昭和34年	1950～1959年	14基	
昭和35年～昭和44年	1960～1969年	34基	
昭和45年～昭和54年	1970～1979年	40基	
昭和55年～平成元年	1980～1989年	63基	5基
平成2年～平成11年	1990～1999年	74基	4基
平成12年～平成14年	2000～2002年	34基	
合 計		269基	9基

Fossa Magna (フオッサマグナ・ラテン語で大きなワレメ) は我が国の地質構造上北東日本と南西日本に分ける重要な地帯であるが、歌碑も便宜上この辺りに沿って東西に分けた。表によると、宮崎県特に牧水出身中学(現延岡高校)のある延岡市と、生家のある東郷町に多く、終焉の地静岡県、妻喜志子の生誕の地長野県、好んで歩いた群馬県にも数多く見られる。なお、詩を刻した碑は群馬県六

合村暮坂峠の「枯野の旅」だけである。

二百六十九基の歌碑に刻まれた歌は三百十三首であるが、牧水の代表歌といえる「幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく」は沼津を始め全国に十三基というように、重複しているものもあるもので、歌碑に用いられた歌は二百十八首である。

歌碑に多く使われる歌は「幾山河」のほかに「うす紅に葉はいちはやく萌えいでて……」と「白玉の歯にしみとほる秋の夜の……」が八基、「白鳥は哀しからずや空の青……」が七基、「若竹の伸びゆくごとく子ども等よ……」が六基、「ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ……」と「日向の国むら立つ山のひと山に……」が五基、「けふもまた心の鉦をうち鳴し……」と「なつかしき城山の鐘鳴り出でぬ……」が四基などが挙げられる。

牧水歌碑で最初に完成したのは、沼津市千本浜公園の「幾山河」の歌碑である。生前、牧水歌碑建設の話が出ると「その様な暗れがましいことは……」と固辞したと聞く。ところが他界直後より早速歌碑建設計画が持ち上がった。牧水は生前、県の千本松原伐採計画反対運動の先頭に立って中止に追い込んだ、今で言う環境保護の元祖であったが、歌碑はその松原に建立がふさわしいと、裾野市の畑

表2 都道県別 若山牧水歌詩碑

都道県名	基数 (文学碑)
北海道	4
青森県	1
岩手県	5
秋田県	1
山形県	1
福島県	3
栃木県	3
群馬県	27 (3)
埼玉県	5
千葉県	7 (1)
東京都	5
神奈川県	5
山梨県	4
長野県	28 (3)
静岡県	26 (1)
小計	125 (8)

東日本の歌詩碑 46.5%

(括弧内は文学碑)

都道県名	基数 (文学碑)
愛知県	3
岐阜県	3 (1)
三重県	1
滋賀県	1
和歌山県	5
兵庫県	1
岡山県	1
広島県	1
山口県	2
愛媛県	3
福岡県	6
熊本県	2
大分県	1
宮崎県	11
鹿児島県	2
沖縄県	1
小計	144 (1)

西日本の歌詩碑 53.5%

合計  
歌詩碑 269基  
〔うち詩碑1基〕  
文学碑 9基  
総計 278基

の中から掘り出された十五噸の碑石を愛弟子鈴木秋灯の世話で御殿場線裾野駅へ移動させ、そこから貨物列車で旧蛇松線千本浜道踏切まで運んだという。歌碑には高弟・医学博士高

橋希人所蔵の牧水の字が刻された。さて、碑石の重さの大雑把な推定法を述べよう。千本浜のような丸い石の場合は(高さ×幅×奥行×一・九)噸、直方体に近いものは(高さ×幅×奥行×三)噸という式がほぼ当てはまる(碑石単位はメートル)。

例えば、千本浜の約十五噸の石は二・二五m×二・〇m×一・八m×一・九一五・四噸、宮崎県日豊線都農駅前約十三噸の石材で、建立の際自衛隊が運搬に協力したと言われるほぼ直方体の石は三・一m×一・二五m×一・一五m×三二十三・四噸と軽度の誤差で計算できる。石の比重によって差異が出るが、歌碑の前でこんなことを思い出すと文学とは異なった別の興味も湧くのではないだろうか。それはさておき、東郷町牧水公園歌碑の「歯を痛み泣けば背負ひてわが母は峽の小川に魚を釣りにき」であるが、牧水は幼時から歯が悪く「痛み始めるとどの歯が痛むのか分からなかった」と述べ、「母マキに連れられて近くの水神様に丑の刻参りをした」とも書いている。「夏となり何ひとつせぬあけくれのわれに規則の如く歯の痛む」のように成人してからも歯のせいか固いものは好まず、食べる量も多くはなかった。魚が好物で沼津で獲れる物は煮魚・焼魚・刺身と何でも喜んで食べた。

喜志子の故郷から送ってくるトロロも好きであった。長男旅人の話だと、肉は食べなかったが、タンシチューだけは好み、沼津の洋食屋「粹太郎」で一切れずつ子供達にも分け与えながら酒を愉しんだという。



講演をする榎本先生

日常のエネルギーは酒で補い一升以上になることもあった。牧水は何時も正座して静かに酒を嗜んだが、子供達が「なぜご飯を食べないの?」ときくと「お父さんはお米のエキスを飲んでるから」と答えた。因みに酒一合は百六十キロカロリーの量で、牧水くらいの量だとエネルギーは充分なのだが、アルコールの分解が行われる肝臓の負担は大きくなる。なお、エチルアルコールは薬理学的に中枢神経抑制作用を持っている。酔って悪さをするのは興奮するからではなく、正常な神経が抑制されるからなのである。牧水は桜と酒と富士を好み、それらの名歌



「牧水歌碑展」は、二百基を超える牧水の歌碑の中でも特に九州・中国地方にある歌碑にスポットを当て、「旅の歌人」といわれる牧水の足跡の一部に触れてみよう、という企画で行われました。『若山牧水歌碑インデックス』を著した、榎本尚美先生がこれまでに集めてこられた歌碑の写真を中心に展示されました。

この企画展にあわせて榎本先生に「牧水の歌碑について」、さらに玉城徹先生に「第一歌集『海の声』を中心として」と題して、講演をしていただきました。開催期間が夏休みと重なったので、県内はじめ首都圏、宮崎県からお客さんが見えられ、歌碑を通して牧水の再発見をしていただけたことと思います。

も多く、牧水全歌八千七百九十四首中桜が二百二十一首、酒が三百八十四首、富士が百二十首詠まれ、その中で歌碑になった三百三十三首中桜は二十八首、酒も二十八首、富士は七首ある。なお、富士を詠んだ歌碑は富士の見える所に限られている。

最後に珍しい牧水歌碑を列挙してみたい。故郷宮崎県には歌碑が「カ所」に纏まっている所が多い。先の牧水公園「うたの小径」の十一基もそうであるが、延岡市九州保健福祉大学構内にドイツ・ハイデルベルクの学者が思索に耽った「哲学者の道」の精神に倣って造られた「青春の散歩道」には市民の寄付による十七基の牧水歌碑が並ぶ。また、延岡市内を流れる一級河川五ヶ瀬川堤防の散歩道には距離標を兼ねた二十六基が見られ、旭化成などスポーツの盛んな町の市民はこれを眺めながらジョギングや散歩を楽しんでいる（沼津牧水会会報「幾山河」十三号参照）。牧水が「幾山河」を詠んだとされる岡山県哲西町二本松峠には牧水の「幾山河」と並んで喜志子と旅人の親子三人の碑が見られる。牧水・喜志子の比翼碑は全国に十基、牧水・旅人の親子歌碑は四基見られる。「幾山河」の歌碑のうち、東北新幹線北上駅前のは牧水自身の揮毫であるが三本川になっている珍しいものである。

牧水は琉球へ行ったことはないが、宜野湾市の「幾山河」の碑は戦争中東郷町へ疎開した学童が無事故郷へ戻れた、その縁で姉妹都市となり、坪谷川の石が送られて日本最南端の牧水歌碑になったというエピソードもある。



ややもすると「お酒好きの気ままな旅人」と思われがちな牧水であるが、自宅の書齋に於いても、生涯千六百日にも及んだ旅にあって、作歌と克明な著述を続けその業績は十四巻にも及ぶ牧水全集となったほどの「勤勉努力の人」であったことを認識して頂きたい。

〈筆者プロフィール〉(えのもと なおよし)  
医学博士、国立相模原病院元副院長、社会福祉法人(障害者施設)アガベセンター センター長

# 幻の峠 二本松へ 五月女 武



「幾山河」の歌との遭遇。それは、軍国少年であった私には少なからず強烈なインパクトで迫りました。この歌こそが、また、短歌という文学との、若山牧水という歌人の存在との初めての出会いでもありました。時は昭和

十九年の春のことと記憶しています。匍匐前進だの夜行軍だのという軍事教練の日常の中で、数年先には最前線に死地を求める運命を思い始めていた多感な旧制中学生にとって、全く日常の対極にあるこの歌が深く脳裡に刻まれたのは自然の勢いというべきでしょう。

あれから六十年、この名歌をいく度口ずさみ、詠われた土地へのイメージをどれほどふくらませたことか。いずことも知れぬ奥深い山峡の道と遙かな空を、どれほど想い描いたことか。名歌のふるさとの地は長きにわたり憧れの山であり、幻の峠であり続けました。歌一つ詠めない散文的なわが身ひとつ月日は百代の過客であることを感得できる年輩に近づくと、漂泊する歌人牧水の魂をゆさぶったであろう土地のイメージが、時として具象像を結ぶのでありました。それは分け入ってもなお青い山の連なる道であり、遙か西方には明るく開けた観念の青空が望める峠であり、越し方を省みれば、そこには遠く日本の原風景とも言うべき山里が配されていないか

ばならない。そういうものでありました。しかしながら、「われわれが旅行するのは、着くためではなくて旅行するためである」とはゲーテのことばのようですが、牧水の旅もまた、到着するためではない終わりなき旅であったでしょう。いわば悠久のときの流れの一瞬の生を生きる旅であつたらうと思うとき、永遠の旅という抽象性が一切の具象像をたちまち消し去ってしまうときもあるのです。



献酒する佐佐木・馬場の両先生

永いこと幻だつた地が備中・備後の国境二本松峠であると知るに及んだのは随分と後年のことでしたが、にわかに現実味を帯びてきたのは平成七年の秋、東郷町での生誕百年記念牧水祭の折でした。車をとばして馳せ参





羽場幹恵さん（前列左から3人目）を囲む  
沼津からの参加者一同

じた哲西町教育委員会のお二方と知遇を得た時から、いつの日にか二本松峠を訪ねたい願望が生まれました。そして平成十年沼津市が主催した没後七十周年記念牧水顕彰全国大会の折、哲西町には必ず行くと決意しました。というのも嵐の中バスを仕立てて遠路大挙して御参加頂いた羽場幹恵会長さんをはじめとする哲西牧水顕彰会の皆さんとお会いし、その熱気に触れたからでありました。そして昨秋長年の願望叶って現実の二本松峠に立ち得たのでした。

山峡の哲西の町は、思いのほか開けていました。高速の中国自動車道、国道一八二号線、芸備線の三幹線が東西を貫く交通至便な地方に変わっていました。二本松峠のあたりには昔をしのばせるに十分な風情をとどめ、旧道を一人辿ってみたい誘惑にかられるような幻の片鱗を各所に視た思いました。「心の鉦をうち鳴らしてつあぐれて行く」旅の衣を、行き暮れて解いたと想像される熊谷屋も、ひなびたたたずまいに再現されていました。

イベントの圧巻は記念講演でありました。佐佐木幸綱先生と馬場あき子先生という当代歌壇の双璧をステージに迎えて中味の濃いお話を伺えたのは、さすが「幾山河」のふるさとならではののぞいたくなく催しと感じ入りました。夕べのレセプションでも、比婆荒神神楽の神秘幽玄の世界に誘われたうえ、佐佐木、馬場の両先生と膝をつき合わせるお近くで酒を酌み交わす機会に恵まれ、感激しました。

全国牧水サミットも数えて五回、いずれにも参加する機会を得ました。回を重ねる毎に牧水を愛し慕う全国の方々とその知己を広め、あたかも旧友同志のような感じで再会できる人の輪が広がっていくことは、老境にあつて、代え難い蓄財をしているように思えてきます。深夜には三次会にもお誘い頂き、隣の東城町

まで足を伸ばしていささか酩酊し、牧水の気分にあやかりつつ床に入りました。

思えば六十年前、「幾山河」の歌に初めて出会い、夢にまで見た幻の二本松峠の麓で一夜を明かし、満ち足りた三日の旅となりました。

（さおとめ たけし 前沼津市教育長）

平成十三年十月二十七、二十八日、牧水が「幾山河」を詠んだ岡山県哲西町で、全国牧水サミットが開催され、沼津牧水会から十五名が参加しました。

初日は、きらめき広場・哲西での佐佐木幸綱氏、馬場あき子氏による記念講演。つづいて伊藤一彦氏をコーディネーターに迎えたフォーラムでは、各地を代表するパネラーからそれぞれの視点で牧水を捉え、各地域の活性化に努力している様子が報告されました。

翌日は、牧水二本松公園での歌碑祭。「幾山河」の歌碑に献花・献酒。短歌の朗詠やコーラス、全国から募集した短歌の表彰が行われました。午後の唄芝居「牧水」では、地元の人々の熱演に大きな拍手がよせられました。今年の十一月に延岡で開かれるサミットでの再会がいまから楽しみです。

## 第48回 沼津牧水祭

### 碑前祭・芝酒盛

十月二十一日(日) 午前十一時

空が晴れ渡った十月の第三日曜日に開催される沼津牧水祭碑前祭は、牧水を通じて知り会えたお馴染みの仲間、懐かしい友人との再会の場であり、牧水に導かれて新たに顔見知りになった人々の出会いの場でもあります。

恒例になった沼津琴城会の大正琴の音に誘われて、牧水にゆかりの人々、毎年このお祭を楽しみにしてくださっている市民のみならず、千本浜の歌碑前に集いました。

今年には愛吟国風会の詩吟で式典の幕が開き、つづいて東海庵青龍師による献茶、当会理事長林茂樹の挨拶。来賓の斎藤衛沼津市長、長澤靖夫沼津市教育長の祝辞、榎本篁子牧水記念館館長の献花・献酒、松の緑を思わせる衣装の花柳稔氏の舞踊、とつづきました。

中学生短歌コンクールの表彰式では、昨年の七月、千本浜に歌碑が建てられた明石海人について歌った第一中の岡本晶子さんから十人が表彰されました。

また、牧水短歌に故中村義光氏が作曲した歌四曲も「牧水のうた」を歌う会によって披露されました。

関高義沼津市議会副議長による乾杯発声の後、参加者歓談の芝酒盛。昨年発表されたようその太鼓による「沼津牧水太鼓」。それにつづく曲では、一般の人も飛び入り参加して、にぎやかに太鼓の音が響きました。

沼津の秋の風物詩となっている碑前祭。哲西町牧水サミットに参加した方、短歌講座に参加されている会員の方々が新たにお手伝いに加わり、スタッフは一層充実してきました。今秋はどんな懐かしい顔、新しい顔に出会えるか楽しみです。



# 短歌大会

十月七日(日)  
午前十時三十分  
沼津市立図書館



第四十八回牧水祭短歌大会は、平成十三年十月七日に、沼津市立図書館視聴覚ホールを会場として行われた。講師は「未来」の選者であり歌誌「群帆」の主宰者である後藤直二氏。午前中行われた講演は、館報二十八号にその要約のような後藤先生の文が載ったので参考にして欲しい。

今年の投稿者数は百九十四首。参加者は百二十二名で、午後は出席者の作品を中心に後藤先生に、懇切なご批評をいただいた。

以下、後藤先生の採られた十首の作品を紹介する。

牧水賞一席

幼子に足を踏まれし盲導犬声もたてずに

座り直しぬ 沼津市 田中 千代

牧水賞二席

通りゃんせゆけば必ず壁ありて越えるじ

ゆもんが思い出せない

徳島県 山本枝里子

牧水賞三席

ラバウルに夫の書きたる軍事便防災袋の

護符となりたり 沼津市 堀内 裕子

選者賞

寝たきりの窓に見えしは雲のみとかなし

く気づく母逝きてから

滋賀県 坂田 順治

三年経てはじめて咲きし風蘭の白く匂う

を老妻とよろこぶ 沼津市 矢田 保久

ああ今日も大部屋にいた! がん末期の

友に小さく合図して寄る

沼津市 青木 初音

かなふなら鍬を枕に死にたかり茄子胡瓜

の花下陰に 静岡市 三枝 理作

夜の窓に火薬にほひ来その愛を享けんと  
決めし花火の記憶 岡山県 植月 弘子

カサゲの細葉ゆらせて野の川を小鮒の

群ののぼりゆくみゆ 函南町塩谷千鶴子

沓岐假泊鳥賊釣り船の漁火に泪拭ひぬ復

員兵吾れは 沼津市 齋藤 俊夫

互選の作品を順位順に紹介する。

寝たきりの窓に見えしは雲のみとかなし

く気づく母逝きてから

滋賀県 坂田 順治

幼子に足を踏まれし盲導犬声もたてずに

座り直しぬ 沼津市 田中 千代

今ならば姑の言葉やんわりと受ける知恵

あり三十年経つ 大仁町 山田ふじゑ

何気なく開きし息子の免許証ドナーカー

ドのはさまれてあり

中伊豆町 鈴木 藤江

黙すことに平和を守る術知りて老いゆく

みちの坂ひとつつ越ゆ

御殿場市 勝間田頼子

息づける蛍火妻がハンカチに包めば浮ぶ

赤き花柄 茨城県 木村 佳

押し花はセピアに化してほるにがき青春

の恋詩集に眠る 長泉町 澤田 角江

(須永秀生)

第14回

雛の歌会



今年の雛の歌会は、平成十四年三月二日の土曜日に「短歌人」の三井ゆき氏をお迎えして牧水記念館の和室で和やかに行われた。四月の気候とも言われた暖かな日で、まさに春を飾る行事になった。出詠歌六十五首、当日の出席者は四十五名。歌会は出席者の作品を優先して行われたが、欠席者の作品もいくつか触れて、作品を理解しようとする講師の姿勢に頷く顔が多かった。

三井氏の採られた作品を中心に報告をする。  
葉牡丹の波打つみどり目に羞し明日の希望少し見えきぬ  
三浦 征江

波打つみどりの具体が下句を支えた。

限りある命尊し癌を病む娘のもとへ杖つき急ぐ  
橋都 道子

これも「杖つき急ぐ」の具体的な表現が、気持ちや作者の年齢などを読む手掛かりになっていて、やや観念が先行する上句を補っている。

何ものもよせつけぬ光放ちつつ十六夜の月中天にあり  
小池みよ子

一息に読み下された思いの集中とその詩的な表現・韻律の良さが魅力。

さざめきつつ通る下校の子らの声路地にひびきて春くる気配  
芹沢 ふく

聴覚的な感覚でいきいきと春を捉えた。こんな形の季節感がいい。

父親が頼みになるという意識熱の子がひたりと付きて離れぬ  
近藤ゆみ子

ひたりの語感の良さ。近年の風潮の父親像とは別の、たいへん好感の持てる父親像が浮かぶ。

その他の問題歌を少し取り上げたい。

漆黒のやみに粉をふく火の鳥を君はコートにかくし棲はせ  
河辺龍二郎

かくしと棲まわすの重複が、作品の意図をやや曖昧にしたが、こんな思い切った表現も試みていいのではないか。

いにしへの海の底ひを仰ぎをりわれも時ゆく旅人にして  
君山宇多子

「われも時ゆく」がやや観念的だが、石灰岩の山岳の、複雑なきれこみを見上げながら悠久の時の流れに身をまかせ、そんな思いが表白されている。

田方野を茜に染めて大き陽が寝釈迦山の端へ没りなんとする  
塩谷千鶴子

この寝釈迦山は伊豆長岡の葛城山の別称。雛の歌会も十四回を重ねて、一つの転機を迎えているような気がしている。

(須永秀生)



## 文化講座

### 牧水の歌碑について

日時：平成13年7月24日(火)  
講師：榎本尚美氏



### 第1歌集『海の声』を中心として

日時：平成13年7月28日(土)  
講師：玉城 徹氏



### 西周における思想形成と沼津

日時：平成13年9月1日(土)  
講師：四方一弥氏



### 西周が沼津で考えたこと

日時：平成14年1月26日(土)  
講師：四方一弥氏



### 初心者のための短歌講座

日時：平成13年4月～平成14年3月  
毎月第2土曜日 午前10時～12時  
講師：須永秀生氏



### 牧水記念館短歌会

日時：平成13年4月～平成14年3月  
毎月第2土曜日 午後1時30分～4時  
講師：須永秀生氏



# サロン音楽の夕べ



## 第1回 『P.ロカテッリとJ.S.バッハの夕べ』

日 時：平成13年6月6日(水) 午後6時45分

会 場：記念館ラウンジ

出 演：佐々木真 (フルート、フラウト・トラヴェルソ)

奥村智洋 (ヴァイオリン)

丹沢広樹 (バロック・ヴァイオリン)

杉山佳代 (チェンバロ)

来場者：135人

## 第2回 『リコーダーの世界』

日 時：平成13年10月13日(土) 午後6時45分

会 場：記念館ラウンジ

出 演：吉沢 実 (リコーダー)

西谷尚己 (ヴィオラ・ダ・ガンバ)

杉山佳代 (チェンバロ)

来場者：140人



## 第3回 『2台のチェンバロの夕べ』

日 時：平成14年3月16日(土) 午後6時45分

会 場：記念館ラウンジ

出 演：木村聡子、杉山佳代 (チェンバロ)

来場者：114人

## 第4回 『キリル・ボエフ ピアノリサイタル』

日 時：平成14年3月23日(土) 午後6時30分

会 場：記念館ラウンジ

出 演：キリル・ボエフ (ピアノ)

来場者：55人



# 平成13年度事業報告

総会 (第15回)	平成13年4月27日(金)午後6時～7時	会報発行
理事会 第1回 (通算83回)	平成13年4月11日(水)午後6時～7時30分	第14号発行 平成13年5月25日
第2回 (通算84回)	平成13年8月21日(火)午後6時～7時10分	館報発行
第3回 (通算85回)	平成13年12月7日(金)午後6時30分～7時30分	第27号発行 平成13年10月10日
第4回 (通算86回)	平成14年3月6日(水)午後6時～7時	第28号発行 平成14年3月20日

## 1 調査研究事業

- (1) 「東京牧水会」への参加
  - 日 時：平成13年9月1日(土)
  - 会 場：東京都日野市百草園
  - 参 加 者：須永秀生理事
- (2) 全国牧水サミット (全国牧水サミット実行委員会、哲西牧水顕彰会、岡山県哲西町、広島県東城町 主催)
  - 日 時：平成13年10月27日(土)～10月28日(日)
  - 会 場：きらめき広場・哲西、帝釈峡観光ホテル別館「養浩荘」牧水二本松公園
  - 参 加 者：15人
- (3) 第6回若山牧水賞授賞式 (若山牧水賞運営委員会 主催)
  - 日 時：平成14年2月19日(火)～2月20日(水)
  - 会 場：宮崎県宮崎市・宮崎観光ホテル 延岡市・野口記念館
  - 参 加 者：林 茂樹理事長、大澤敏夫会員、市川真理事務局員

## 2 第48回沼津牧水祭の運営

- (1) 短歌大会
  - 日 時：平成13年10月7日(日) 午前10時30分～午後4時
  - 会 場：沼津市立図書館 視聴覚ホール
  - 講 師：後藤直二氏
  - 応募短歌：194首
  - 参 加 者：122人
- (2) 碑前祭・芝酒盛
  - 日 時：平成13年10月21日(日) 午前11時～午後2時
  - 会 場：千本浜公園 牧水歌碑前
  - 参 加 者：約 500人

## 3 文学講演講座の開催等

- (1) 講 演
 

「牧水の歌碑について」 日 時：平成13年7月24日(火) 午前11時～正午 会 場：記念館会議室 講 師：榎本尚美氏 参加者：40人	「第1歌集『海の声』を中心として」 日 時：平成13年7月28日(土) 午後1時30分～午後3時30分 会 場：記念館会議室 講 師：玉城 徹氏 参加者：40人
「西 周における思想形成と沼津」 日 時：平成13年9月1日(土) 午後1時30分～午後4時 会 場：記念館会議室 講 師：四方一弥氏 参加者：20人	「西 周が沼津で考えたこと」 日 時：平成14年1月26日(土) 午後1時30分～午後4時 会 場：記念館会議室 講 師：四方一弥氏 参加者：24人
- (2) 第14回「雛の歌会」
  - 日 時：平成14年3月2日(土) 午後1時30分～午後4時
  - 会 場：記念館会議室
  - 講 師：三井ゆき氏
  - 応募短歌：65首
  - 参 加 者：45人
- (3) 初心者のための短歌講座
  - 日 時：平成13年4月～平成14年3月 毎月第2土曜日 午前10時～12時
  - 会 場：記念館会議室
  - 講 師：須永秀生氏
  - 参 加 者：延べ 203人
- (4) 牧水記念館短歌会
  - 日 時：平成13年4月～平成14年3月 毎月第2土曜日 午後1時30分～4時
  - 会 場：記念館会議室
  - 講 師：須永秀生氏
  - 参 加 者：延べ 149人
- (5) 第12回「中学生短歌コンクール」募集・表彰
  - 募集期間：平成13年5月25日(金)～7月19日(水)
  - 応募短歌：1,625首 (15校 1,625人)
  - 入選短歌：30首 (30人)
  - 選 者：青木朝子、川口和子、須永秀生、杉山芳春
  - 表 彰：平成13年10月21日(日) 沼津牧水祭碑前祭にて

## 4 特別企画

- 「牧水歌碑展」— 九州・中国地方の歌碑をたずねて —  
 開催期間：平成13年7月24日(火)～8月26日(日)  
 会 場：記念館ラウンジ  
 入 場 者：1,227人

## 5 音楽イベント 「サロン音楽の夕べ」 牧水記念館ラウンジ



## 社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条 この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もつて、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 歌人若山牧水に関する調査研究

(2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営

(3) 文学講演会及び文学講座の開催

(4) 文学に関する各種出版物の刊行

(5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託

(6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条

(1) この法人の会員は、次のとおりとする。

(2) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人

(3) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人

(4) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもつて推薦された者

された者

第六条

会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもつて会員となるものとする。

第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。

(1) 正会員 一〇、〇〇〇円

(2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上

(3) この法人の会費は、次のとおりとする。

(1) 正会員 年額 五、〇〇〇円

(2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉 林 茂樹  
〈副理事長〉 杉山 光男  
〈理事〉 浅井 治 河本與司幸  
青木 朝子 保坂 輝夫 田中 和男  
八十濱俊一 須永 英男 金子 安夫 川口 和一  
杉山 重義 鈴木 芳春 弘行 一弥

## 編集後記

花も葉も光りしめらひわれの上に笑みかたむける山ざくら花 牧水

今年、牧水が湯ヶ島で山ざくらを堪能したようには、ゆつくりと花を愛でる間もなく、早いペースで桜前線が日本列島を縦断していきました。昨年は、特別企画として「牧水歌碑展」が開催されました。展示は、榎本先生の「若山牧水歌碑インデックス」を基に、写真を集め、原稿をつくり、パネルにするという手作業を、事務局総動員で行い、開催にこぎつけました。

この展示にあわせて、ご講演をいただいた玉城先生の玉稿は、歌壇のみならず世間一般の牧水の価値評価に対する一石を投じているような気がします。

哲西町での牧水サミットには、沼津牧水会からも十五名が参加し、哲西町、東城町の方々の温かいおもてなしを受けました。そして延岡での再会を誓いあつたのでした。

をち方に離るる友をおもふ時かがやく珠をおもひこそすれ 牧水

当会ではホームページを開設しました。皆様のお声をお寄せください。どうぞよろしくお願ひいたします。